

平成22年度FD推進会議（新任専任教員向け）
～大学教員の職能開発とFD～

開催日程： 平成22年8月9日～10日
開催場所： グランドホテル浜松
参加報告者： 工学部 准教授 佐藤 伸二郎
報告作成日： 平成22年8月23日

日程表

8月9日（月）

I. 全体説明（オリエンテーション）	50分
II. パネル・ディスカッション	90分
III. グループ討議	60分
IV. 模擬授業ワークショップ説明	30分
V. 授業概要作成	60分
VI. 懇親会	90分

8月10日（火）

VII. 模擬授業ワークショップ及びグループ単位でのふりかえり	180分（午前）と120分（午後）
VIII. 全体ふりかえり	60分

概要

I. 全体説明（オリエンテーション）

最初のオリエンテーションでは、本会議に関して3点にわたり説明があった。

- ① プログラムの企画意図およびプログラムの流れ。日程表の流れ説明から、配布資料の説明があった。
- ② 本会議が考えるFDとは何か。FDの歴史から始まり、狭義のFD（授業内容・方法の改善）と広義のFD（職能開発＝プロフェッショナル・デベロップメント）の説明があり、そして日本の大学では教員の「研究」面では評価されやすいが、「教育」面では評価されにくいという歴史的土壌があると語られた。FDの目的としては、「大学の教育力向上」が狭義FDの目的であれば、広義FDの目的は「スペシャリストは多数いるがプロフェッショナルはほとんどいないという日本の大学組織の現状の是正」があげられる。そこで本会議の目的は、1日目のオリエンテーションとパネル・ディスカッションを通じて広義のFDを理解した上で、狭義のFDのあり方を考えるために2日目に模擬授業ワークショップを行うこととする。そして正課教育の質保障システムとしてPDCA評価の説明があり、シラバスの作成（PLAN）、授業の実施（DO）、自己評価（CHECK）、シラバス・授業方法・成績評価の改善（ACTION）を通じて、システムチェックができるとの話があった。

- ③ オリエンテーション用アンケートの結果説明。参加者全員に事前アンケート行い、その集計結果の発表があった（詳細略）。

II. パネル・ディスカッション

平成21年度の本会議参加者3名による、実情の紹介と質疑応答があった。その中で印象に残ったものを列記する。

- 「建学の精神」を深く理解することが大切。
- 一方通行の授業ではなく、双方通行が面白い授業。
- シラバスは達成目標を明確にし、学生の要求に応えるためのものでもある。学生と教員の契約書みたいな物。また教員がこのような授業をするという保証書のような物。
- 授業評価について、PDCA評価は最初のPLANが明確でないとうまく機能しない。自己点検評価はPLANにあり、未来に向かって良質なシラバスを作りいい授業をするという努力をするところから始まる。
- 授業のマネジメントとスキルとして、①授業の進め方に関して最初に学生と約束をする、②目を合わせて授業を進める、③できるだけ名前を覚える、④授業で複数のメディアを利用する、等が挙げられる。

III. グループ討議

参加者が8名ずつのグループに分かれて、この時間では自己紹介と、最初の全体説明とパネル・ディスカッションについて、また授業に関して個人が持つ悩み事について意見交換を行った。私はBグループに属し、運営委員を含めた9名で討議した。この中で印象に残った討議を列記する。

- 学生との年齢が近いこともあり、教員と学生の間柄の線引きが難しい。
- ゼミの授業で学生が参加しながらの進め方。
- 理工学系の授業では、学生の基礎科学クラスの理解度レベルに差があり、授業レベルの設定が難しい。
- やる気のある学生に「プチ達成感」を与えて、やる気を促進する。
- 意見の違う学生同士でグループを作り、討論させる。
- 授業形態でパワーポイントスライドに空欄を作るのではなく、空欄がある別のプリントを用意し、授業中に学生にその空欄を書かせる。学生はそのプリントを持ち帰る。

IV. 模擬授業ワークショップ説明

模擬授業ワークショップの流れの説明があった。日程的にこの後約1時間の時間内で、模擬授業の概要を考える。模擬授業の講義名、想定している授業の設定（カリキュラムにおける位置付けと対象）、この15分の授業の到達目標と、模擬授業概要を用意された用紙に書き込み、翌日朝8時まで提出する。模擬授業は各グループで行い、各自の持ち時間は15分、その後10分ほど質疑応答の時間がある。また授業形態はホワイトボードだけを使用する。

V. 授業概要作成

私の模擬授業の内容は、専門分野が土壌学なので、講義名を「土壌分類学」とし、「2年あるいは3年生向けの選択必須科目」という設定にした。また、「受講者が土壌の粒子構成を基に、土性を決定することができる」ことを模擬授業の到達目標とした。

VI. 懇親会

夕食をとりながらの懇親会が行われた。テーブルはグループごとに分けられていて、ここでグループのメンバーと親睦を深めることが、翌日の模擬授業でもその教員の人柄や授業を理解するうえで重要であると感じた。

VII. 模擬授業ワークショップ及びグループ単位でのふりかえり

前日に作成した模擬授業概要のグループ員全員分のコピーが配布され、各グループ員の15分の授業を、学生と教員の両方の立場から評価する。用意された評価用紙に良かった点と改善点を書き込み、ワークショップ終了後、自分の模擬授業用のグループ員の評価用紙を返却してもらう。

私が一番印象に残ったことは、分野によって授業の進め方に相当の違いがあるということです。今回のワークショップでは、意図的に分野の違う参加者がそれぞれのグループに配属されていたので、その意味では授業形態はホワイトボードだけだったが、他の先生の授業の進め方に関して参考にできる点も多かった。全員の授業が終了した後、ワークショップのふりかえりを行い、意見交換を行った。そこで上がった意見を列記する。

- 他分野の先生の授業が面白かった。
- 一つのことを教えるのに、ストーリー性を持って話をすると分かりやすい。
- 学生の目線で分かるように授業する。
- その授業のキーワードは板書をして説明する。
- 興味ある授業を90分持たせるには、余談・雑談・具体的事例を取り入れるといい。

VIII. 全体ふりかえり

各グループでの模擬授業が終了後、各グループでのふりかえりの報告を全体会で行い、その後全体でのふりかえりを行った。どのグループからも授業形態や授業レベルの設定などに関して同様の感想や意見が出ており、再度授業の進め方に関して、新任でありながら教員が様々な苦労・工夫をされていることが分かった。授業形態に関しては、パワーポイントスライドと板書を併用されている教員が多く、私自身にとって参考になった。様々なメディアが授業で使える中で、授業内容を学生に理解させるという観点から始めるべきで、それからこの内容を教えるのはどのメディアがいいかを決定する、という発想は非常に参考になった。一つの意見として、模擬授業の形態がホワイトボードに限られている点で、多くの教員がパワーポイントを使用している現実から見ると、模擬授業の実用性に欠けているのではという意見もあった。

本会議に参加しての意義

私は教員一年目の新任なので、大学のシステムや授業の組み立て方から、またFDのことに関しては全く無知で、今回の推進会議に参加しました。その意味では、今回の推進会議が新任教員向けであったことから、大変有意義で多くのことを学びました。

まず初日のオリエンテーションでの、FDについての説明のプレゼンテーションが大変有意義で、FDの歴史から意義、目標までわかりやすく説明がなされていた。その中で一番教員として私自身の為になったことは、到達目標の書き方について、カリキュラム・ポリシーの一つとしての「良質なシラバス」の作成方法についてです。狭義・広義のFDにかかわらず、教員がFDの成果を具現化できる場所がシラバスであり、FDの質保障システムのPDCA評価の中でも「PLAN」の「良質なシラバス」の作成が評価の正のサイクルへの入り口ではないかと思いました。

そして2日目のメイン活動である模擬授業に関して、教員として一番勉強になったことは、私の専門の授業を専門外の人に分かりやすくしかも短時間で準備をし、限られた時間内で発表・質疑応答をするというプロセスを踏むことでした。それによって、私の普段の授業にも取り入れれば良いと思う点が発見できました。特に1年生向けの授業では、授業内容の専門性（最新研究の知識）だけを表に出すのではなく、それを学生が理解できる様に授業することが主眼で、また授業中一定時間ごとに学生とのやり取りを通じて理解度をチェックする必要があるという点です。それとは逆に4年生や大学院生向けの授業では、専門の最新の研究の知識を、学生の理解度レベルに下げることではなくて、学生が向上意識を持てるように如何に授業をするべきかと考えるようになりました。その意味では、模擬授業を通じてこの様に考えることができたことは、「プロフェッショナル」な教員になる第一歩ではないかと思えます。もう一点模擬授業に関しては、専門の違う教員が同じグループになることで、違った視点で意見が交換されることは重要だと思いますが、私のように授業の組み立て方や進行方法もまだ未熟な教員にしてみれば、同類学科の教員の方からのそのような意見が非常に貴重ではないかと感じました。

推進会議全体を通じて特に私自身のこれまでの授業に関しての振り返りですが、授業形式がパワーポイントスライドを使っての説明だけなので、板書、プリント、ビデオ等、他に様々な工夫をされている教員の話聞き、学生に授業を理解してもらうことが第一義で、それから授業形式を決めるという考え方が非常に参考になりました。